

池田和彦

祭りは村おこし



「実は、飲んだ勢いで始まったんです。子供の頃は、夜店があったり、盆踊りがあったり、のど自慢大会があったり…。それをとお話してくれたのは、僕たちの上の世代。僕たちも何かできないかと。」
今回ご紹介するのは、生まれ育った埴生で、新しい祭り【義仲ゆかりの郷源平埴生まつり】を立ち上げた実行委員のひとり、池田和彦さん。
埴生には、春に獅子舞、秋に御輿祭りがある。



小矢部市としても木曾義仲の大河ドラマ誘致活動に力を入れていることもあり、埴生八幡宮の宮司さんとも相談しながら進めた。
だんだん子供達の数が減ってきている。子供達もスポーツ少年団や習い事で忙しい。子供達同士で遊ぶ機会も減ってきている。
「埴生祭りを通じて、子供達の記憶に残る思い出を作ってあげたい。」

今の子供達は、ショッピングセンターやレジャー施設に車で移動して遊びに行くことがほとんど。小銭を持って歩いて遊びに行く感覚が少ないように感じる。
「ばあちゃんが孫の手を引いて、歩いてお祭り会場に。じいちゃんが孫にお金をせびられて、喜んでお金を払う。そんな光景を復活させたい。」
三世代で楽しめる祭り。地域の人が触れ合う場。
「祭りの開催をギリギリまでどうするか悩んでいた。それでも所要所で役割分担して皆のおかげで出来たと思う。」



8月11日に開催。歴史跡地散策ウォークラリー、義仲・巴の講座などのイベント。射的、輪投げ、焼きそばなど夜店の屋台は、青年団など各種団体の若手が担当した。
初めての試みだった埴生祭りは、大成功だった。予想以上のお客様にきて頂き、屋台の食材がなくなるほど。来年も継続していく。

「地域の皆さんに本当にお世話になった。話になっていいるなと感じます。消防、児童クラブ、PTAなど活動する中で、いろいろな人と出会い、勉強になって成長させてもらっている。」

現在、子供達を地域で育てていくような行事が減ってきている。伝統的なお祭りはあるが、習い事や試合と重なり、参加する子供達が減ってきているのが現状。
「できれば習い事などに負けない祭りに育てたい。」
友達の家に行ってもゲームで一人一人遊んでる。昔はそうじゃなかった。遊びの中で縦社会を学ぶ。環境がそうさせてくれる。
「いつかは『埴生祭りがあるから他を休む』と優先してもらえるようなお祭りに成長させたい。」
「埴生祭りをきっかけに、子供、学生、二十代、僕らの世代、じいちゃんばあちゃんの世代が、盛り上がってくれば最高ですね。」

■池田和彦(いけだかずひこ)

昭和46年1月21日生

子供が三人。厳しい中にもなにか楽しむ趣味を今から見つけた。健康のためにも走ることも始めた。埴生口からマラソンコースやウォーキングコースが出来ればいい。